



新年のご挨拶

病院長 松尾 清一

名大病院職員の皆様、明けましておめでとうございます。

昨年は一昨年にもまして波乱の年でしたが、名大病院にとってはいくつかの課題が達成できた年でもありました。まず、病院職員一丸となって取り組んだ病院機能評価の受審と認定の獲得です。これはたんに認定を得るというのが目的ではなく、病院業務を総合的に改善することを目指して取り組みました。その結果、病院の雰囲気が大いに変わったことを実感された方も多いと思います。これはその後病院機能推進本部に引き継がれ、現在も引き続き名大病院における医療のプロセスの改善のために努力が重ねられています。

名大病院は高度で先端的な医療を積極的に取り入れること、臨床研究を推進すること、またそれらに関わる人材の育成をおこなうことが社会的な使命となっていますが、このような活動を総合的に支援する部門として、これまでであった遺伝子再生医療センターと臨床研究推進センターを発展的に統合して、先端医療・臨床研究支援センターをスタートさせました。病院あげて、明日を拓く医療の開拓にチャレンジするつもりです。

名大病院は国立大学病院長会議において、感染対策協議会の事務局を担当しており、昨年はアシネトバクターなど耐性菌による院内感染が話題になった折、他病院への支援も含めて大きな貢献をしました。化学療法部も着実に業績を伸ばし、名大病院における化学療法の管理はここ数年で飛躍的に改善されています。ICUの増床、麻酔科医の増員などで、手術数も着実に増加

し、病院横断的な部門の充実がある程度できたのではないかと考えています。一方で、患者数が増え病床稼働率もかなり上がったことで、以前にもまして忙しい病院となっています。加えて他院では治療が困難な患者さんの紹介が増え、医療安全面でも一層の注意喚起が必要となっています。今年度中には待望久しい医療の質安全管理部の専任教授が決定する予定です。今年は、医療安全のみならず医療の質の向上にむけての新しい飛躍が期待できる年になりそうです。

今年にはさらにメディカルICUが完成しますし、周産期医療の充実と人材育成を目指した施設整備を行うとともに必要な機器の更新や新規購入も積極的に行っています。しかし施設や機器のみでは病院はうまく機能しません。何といたっても人材が重要です。優秀な人材が集い、さらに教育システムによって一層高まってゆくこと、そして一人ひとりがやりがいのある職場環境にすることが重要であると考えています。円滑なコミュニケーション、社会貢献のマインド、を名大病院の文化としてゆきたいと思っています。

今年一年が皆様にとって、充実したものとなるように祈っています。



目次

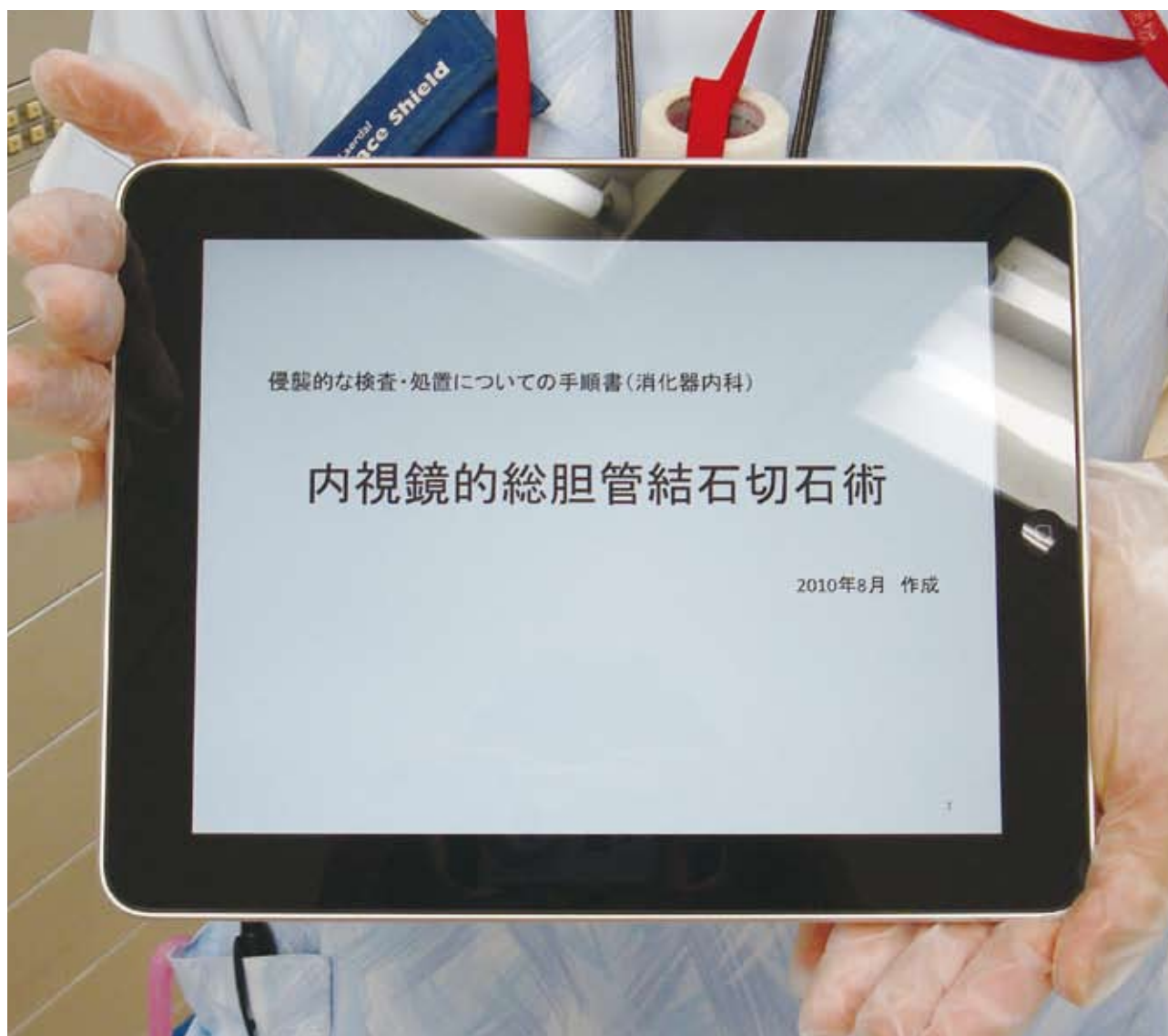
①新年の挨拶／松尾病院長	1	⑧ボランティアさん紹介	8
②病院機能推進本部における活動状況	2	⑨行事報告	9
③平成22年度鶴舞公開講座を開催	3	⑩健康講座／脳神経外科	16
④キャンパスクリーン	3	⑪ナディック通信	17
⑤「臓器移植法」改正後における本院の体制と取り組みについて	4	⑫名大病院の医事統計	19
⑥メンタルヘルス講習会を開催	6	⑬編集後記	20
⑦医療安全・感染対策研修(後期)を実施	7		

病院機能推進本部における活動状況

病院機能推進本部タスクリーダー 後藤 秀実

昨年から今年にかけて病院全体で取り組みました病院機能評価の受審は、当院での医療の機能と質の改善において成果を挙げたと思っております。しかし、さらなる「安全かつ最高水準の医療の提供」を実現するため、本年5月に病院長のもとに「病院機能推進本部」が設置されました。病院機能推進本部は、院内の各職種から選任されました23人のタスクフォースメンバーとその中から指名されました内科系、外科系、中診系、看護系、薬剤系のサブリーダーから構成され、月1回それぞれの会議を開催してマニュアル作成に励んでおります。さらに内科・外科・中診系のサブリーダーは、各診療科の医局長や中診部門の責任者とマニュアル作成につ

いて具体的に議論もしております。看護系と薬剤系に関しては、各々の内部で議論し作成されております。このように新規あるいは見直されたマニュアルを職員の方々にどのように活用していただくかが最大の問題でありました。この点に関しては、i-PADを導入することにより、皆様が利用しやすくかつ解り易いマニュアルになると考えております。まだまだ、手術後のマニュアル作成や多職種間のすり合わせなど解決すべき問題が残っておりますが、病院の職員全員に知って守っていただくマニュアルにすべきと思っておりますので、ぜひご協力をお願い申し上げます。



平成22年度鶴舞公開講座を開催しました

総務課 総務第一掛

平成22年11月20日(土)に「食事:もともと身近な健康法」と題し、平成22年度鶴舞公開講座を開催しました。

高齢社会により、医療費、福祉費等を含む社会保障給付費が過去最高の水準となり、医療費は国民所得を上回る伸びを示しています。そのため、国も、健康づくりの総合的推進を図ることとし、若年期からの予防対策にも力を注いでおり、病気を未然に予防する健康づくりの重要性が一層増しています。

そこで、今年度は健康づくりの3要素の1つである「栄養」つまり「食事」を正しくとることがもともと身近な健康法と考え、「食事」を題材と、栄養管理部 鈴木富夫 副部長による「食事のとり方で良くも悪くもなる生活習慣病」、薬剤部 矢野亨治 主任による「薬と食品の飲み合わせ～そのメカニズムから学ぶ～」、老年科学 葛谷雅文 准教授による「高齢者の栄養に係る問題点-特に摂食障害と栄養障害」の3つの講演を用意しました。

当日は、リピーターを数多く含む20代から80代の幅広い年齢層約230名が受講し、講師のこばに熱心に耳を傾け、質疑応答も活発に行われました。講演終了後には、受講者から次年度もぜひ参加したいという声が多く聞かれ、大変な好評を博しました。



キャンパスクリーン

総務課 総務企画室

平成22年12月16日(木)に「キャンパスクリーン」が教職員及び学生の協力を得て実施されました。これは、構内の環境美化及び環境省が提唱する12月の環境月間に環境保全に対する関心を高めることを目的に毎年実施しているもので、名古屋市の一構成員として境界の外周清掃も併せて行い、環境美化に努めています。

当日は、冷たい強風が吹くなか、参加者は分担区域ごとに別れ、空き缶・紙くず等の除去、雑草の刈り取り等を行いました。

参加いただいた皆様には、多忙なところ協力をいただきありがとうございました。



「臓器移植法」改正後における本院の体制と取り組みについて～「おくりびと」としての医療人・其の二

移植連携室長/脳死者からの臓器移植に関する実務委員長 木内 哲也

報道等で御存知のように、改正された「臓器の移植に関する法律」(臓器移植法)が昨年7月17日に施行され、新しい制度が始まっています。この制度により、脳死の疑いがある場合、その方の生前の臓器提供意思が不明でも、ご遺族が承諾した場合には、脳死の判定と臓器の提供に進むことができるようになりました。同時に、15歳未満の方からの臓器提供も可能になりましたが、18歳未満の児童に対しては、生前に虐待等があった疑いを確認することが義務づけられました。これに先立って、既に昨年1月17日からは、自分の死後に親族へ優先的に臓器を提供する意思を表明することが可能になっています。

法律の改正によって、どんな変化が起きているのでしょうか？改正法施行後の昨年8～10月の3ヶ月間に脳死後臓器提供された方は16人。この数字は施行前の半年間の5倍にあたります。このうち15人が臓器提供意思表示カードをもたない方でしたが、ご遺族から、『本人の意思を尊重したい』だけでなく『誰かの役に立ってほしい』

『身体の一部が生きてほしい』『生きていた証がほしい』『残された家族の誇りであり心の支え』といった言葉が発せられています。内閣府世論調査でも、『脳死後に臓器提供したい』と答えた人は既に国民の4割を超えていますが、日本でも、臓器移植医療に対する意識が高まっていることがわかります。

当院は、肝臓・腎臓・小腸などの臓器移植医療の認定施設であるばかりでなく、臓器の提供を支援する施設として、10年以上にわたって体制を整えてきました。一昨年11月には旧制度の下で改めて脳死下臓器提供ミレージが行われています。今回の法改正を受け、当院では、昨年初めから新たな体制整備の準備を進めてきました。新しい制度の下では、不慮の事故や無念のご病気に見舞われたご遺族の意思、亡くなったお子さんの被虐待、小さなお子さんの脳死状態などをこれまで以上に厳密に判定し、臓器を提供する権利もしない権利もともに守ることが求められています。



改正法施行前からの準備期間を経て、去る11月16日、院内の脳神経外科・神経内科・小児科・麻酔科などからなる脳死判定委員会、小児科・精神科などからなる児童虐待対策チーム、医療倫理委員会、加えて救急・集中治療部、ICU、手術部、検査部、移植連携室、移植外科、総務課・医療サービス課など事務部の関係者が一堂に会し、小児の脳死後臓器提供を想定した院内シミュレーションが行われました。既に機能している『名大病院臓器提供マニュアル』を元に、新しい制度と社会の変化の中で、当院が如何に地域の範としての役割を果たしていくかについて、熱心な議論と検討が行われました。こうしたシミュレーションによって、院内の準備

体制がさらに整い、意識が高まったことはいうまでもありません。

以前の『かわらばん』（2010年1月1日発行 通刊75号 参照）でも触れたように、死後の臓器提供の権利を医療機関として支援することは、移植によって救命される方たちの支援に留まらず、故人やご遺族の意志を支えることであり、ご遺族の悲しみへの癒しとなることも少なくありません。医療機関が臓器提供の意志を支援するには、実際には大変大きなエネルギーが必要ですが、『治す』『生かす』ことと並んで、よき『おくりびと』であることも、医療人の大切な使命としてますます重要視されるようになっていきます。



メンタルヘルス講習会を開催

総務課 安全衛生管理室

平成22年11月10日(水)に、鶴舞地区職員を対象に『うつ病と睡眠障害～早期発見と治療戦略』を題に 太田龍朗名古屋大学名誉教授(現:名古屋第一赤十字病院心療相談センター長)をお招きし、メンタルヘルス講習会を実施いたしました。

この講習会は、職員の安全衛生の観点から、昨今増え続けている「心の病」についての症例とその対応に関し理解いただき、少しでも「心の病」の職員を減少させることを目的として企画されたものです。

病院長による開会の挨拶の後、太田先生から

- ・わが国の自殺とその対策
 - ・うつ病の症状と早期発見の重要性
 - ・うつ病の脳内メカニズム
 - ・うつ病の治療
 - ・専門医へ紹介した方がよい場合
 - ・復職判定のポイント、睡眠と生活リズム
- 等について、丁寧にわかりやすく解説がありました。

会場には、教員、コメディカル職員、看護師、事務職員等170名を超える参加者が集まり、太田先生の言葉に熱心に耳を傾け、今後も定期的を開催してほしいなどの意欲的な意見も寄せられ、大変好評を博しました。

PS. 教職員の皆様へ

鶴舞地区におきましては、次のような『心の相談室』を昨年から開設しておりますので、是非ご利用ください。

仕事の充実と心の健康への支援



鶴舞地区職員のための心の相談室

相談内容は仕事や家庭、プライベートの悩み、愚痴・・・どんな些細なことでも結構です。こんなこと、なんて思わずにご利用ください。

なんとなくしんどい、という心の声を放っておかないでください

プライバシーは守られます

開設時間は月曜日及び水曜日の 11 時～15 時、水曜日のみ 17 時～19 時です。

ご利用にあたっては初回の面談予約のみご連絡ください。

PHS : 4 2 0 2

✉ メール : i - kokubo@med.nagoya - u.ac.jp

院内チャットメール : [箱 先](#) → 臨床心理士 → 小久保 勲



医療安全・感染対策研修(後期)を実施しました

医療サービス課医療安全管理掛

2010年12月6日(月)～12月10日(金)にかけて、名大病院で働く方に対して、医療安全管理および感染対策に関する研修を実施しました。

この研修は法令に基づき年2回の開催が義務づけられているため、多くの方が出席しやすいように、2005年度後期研修から同一内容で複数回の研修を行っています。

<医療安全管理研修について>

以下の4つの項目について実施しました。

1. 医療の質・安全管理部の取り組みについて

医療の質・安全管理部長から、患者さんの誤認防止や転倒転落事故防止について、報告がありました。

2. アナフィラキシーショックについて

救急・集中治療部医師から、早期発見のポイント・発見時の対応処置・使用薬剤・必要な備えについて、お話がありました。

3. 持参薬確認について

薬剤部から近年の状況(院外処方化で様々な薬剤を持参する患者さんが増えている等)、名大病院における確認方法・注意点について、研修を行いました。

4. 病院機能本部の取り組みについて

病院機能推進本部から、名大病院が2010年6月に(財)日本医療機能評価機構から認定を受けた後も、病院機能・医療の質の改善に継続的に取り組んでいることが報告されました。

<感染対策研修について>

院内感染対策チームから、医療廃棄物の取り扱いと共に、最近注目を集めた「多剤耐性菌」対策について、研修を行いました。



ボランティアさん紹介

医療サービス課 患者サービス掛

平成22年10月29日に本院のボランティアさん3名が、日本病院ボランティア協会から感謝状を受けられました。受けられたボランティアさんは次の方達です。

広場ナディック 中川三千代さん
外来棟 鈴木和子さんと北野清子さん

広場ナディックで活動されている中川さんは、平成18年5月からのから開始され、今年、1,000時間を達成されました。当院の看護部長退職後、広場ナディックのボランティアとして、日々、患者さんのためにご尽力され、施設の充実についての助言もいただき、今日の広場ナディックの発展に寄与されました。

外来棟で活動している鈴木さんは、平成16年4月9日

から開始されています。中区千代田という当院から近いこともあっていつも自転車で通院されています。現在は週2回も活動され、益々、元気を患者さんに分けながら、ご自身も元気を受けながら活動され、活動日を楽しみにされています。

最後に、外来棟で活動している北野さんは、平成9年8月1日の当院ボランティア導入開始時から始められ、13年間活動に励まれ、途中、骨折等のご病気も克服され、現在は元気に活動されています。

このように、当院では平成16年度に最初の1,000時間表彰を受けられてから、今回で延べ11名の方達が受けられました。

今後の活躍を期待して、来年からも多くのボランティアさんが表彰されるよう楽しみです。



日本病院ボランティア協会 1,000 時間表彰を受けられた鈴木さん(左)と北野さん(右)



中川さん

行事報告

○ボランティアコンサート(エスパーニャ エントウ パイス)

医療サービス課 患者サービス掛

「エスパーニャ エントウ パイス ～名大病院でスペインを～」を平成22年11月2日(火)にフランシスコ ザビエル ギジェンさん、ザビエル エンジェルズ カンパニーの村瀬永子さんと平山真理さんが、スペインの歌と踊りを当院で披露されました。

ザビエルさんは、日本、スペイン、オーストラリア等世界各国で講演され、パフォーマンスショー、バレエ団の公演、屋内外イベント、オペラ出演に至るまでジャンルにとらわれることなく幅広く活躍されています。

当院からは100名を越す患者さんが参加され、キーワードとして「喜び」「楽しさ」「癒し」。いろいろなジャンルの音楽を「フラメンコ」の要素を生かしたスタイリッシュなダンスで、ストーリーのある陽気で楽しいパフォーマンスを楽しんでいただきました。



行事報告

○ボランティアコンサート(コーロ・アマービレ)

医療サービス課 患者サービス掛

平成22年12月3日(金)の午後、当院のリハビリ広場で、女声合唱コーロ・アマービレのみなさんによる「クリスマスコンサート」を開催し、100名程の患者さんが来場されました。

曲目はクリスマス音楽やその他、どなたもよくご存じの曲を聴かさせていただきました。

最後には、参加者も一緒に「あわてんぼうのサンタクロース」の合唱を行いました。

出演者のみなさんは、大変練習を積まれており、女声合唱がとても豊かですがすがしく、踊りも取り入れた、見て聴いて楽しいひとときでした。

この申込は当院小児外科病棟の看護師さんからいただき、合唱コンクールに数多く参加されており、活発に活動されているすばらしい合唱団の皆さんでした。





行事報告

○ボランティアコンサート(名大病院クリスマスコンサート)

医療サービス課 患者サービス掛

平成22年12月21日(火)に「名大病院クリスマスコンサート」と題してパーキンソン病友の会の皆さん約30名とソプラノ歌手の鈴木信子さんにより、クリスマスコンサートを開催しました。

パーキンソン病友の会の皆さんは、定期的に、当院の広場ナディックで行っている音楽療法の発表の場として今回で3回目の出演となります。曲目として、「ありがとう」、「ジングルベル」他をパーキンソン病友の会の皆さんに歌っていただきましたが、ご病気を持った患者さんという感じはなく大層楽しく、聴く方も楽しさと元気をいただけた一時でした。

「ある晴れた日に」、「トルコ行進曲」他を鈴木信子さんに歌っていただきました。やはり、直接聴く歌声は迫力があり、美しく、楽しい時間を過ごしていただけた。

演奏会が終り、帰りがけの患者さんの多くは、笑顔でいっぱいでした。





行事報告

○手づくりクリスマスコンサート

看護部(QCサークル) 姫野 美都枝

昨年のクリスマス会・夏の音楽会に引き続き、平成22年12月24日(金)に看護部QCプロジェクト主催によるクリスマス音楽会が開催されました。3回目となる音楽会では、心温まる総合診療科の鈴木先生による司会、病院長のあいさつ、看護部QCサークルの皆さんのハンドベル演奏、救急部の山本先生によるMr.Childrenの名曲等などに続き、循環器内科の先生方によるバンド演奏、そして心にしみる「サライ」の合唱などが行われました。終了後には、病院長から、一人ひとりにサンタブーツや風船のプレゼントがあり、寒い中参加された多くの患者さんと楽しいひと時を過ごすことができました。演奏や歌声につられて外来や各部門の職員も数多く参加してくれました。主催した私たちも、参加した一人ひとりの患者さんから勇気と希望をいただきました。次はまた多くの患者さんと音楽を通じて心が一つになる時間を持つことができるよう、楽しい企画を考えていきたいと思います。





健康講座／脳の病気あれこれ

脳神経外科 教授 若林 俊彦

皆さんに、脳の病気でご存知なものを思いつくまにあげてみてくださいとお願いしたら、すぐさま、「脳卒中(くも膜下出血、脳出血、脳梗塞)、脳腫瘍、てんかん、頭部外傷、パーキンソン病、髄膜炎(感染症)、認知症、うつ病、統合失調症、水頭症、先天奇形」などなど、きつとたくさん名前を挙げられる事と思います。本当に多くの病気が脳には発生します。それだけでなく、あなたの周りには「最近、頭が痛い」「首や肩が痛くて夜中に目が覚める」「体が思うように動かない」「手足がしびれる」「目がよく見えない」「物覚えが悪くなって痴呆症じゃないかしら」なんて言う、頭の病気に関係する症状を訴えている人はきつと多いのではないですか。でも、そんな人に、「それじゃあ、早く脳神経外科にかかって、しっかり診てもらって、悪いところを治してもらいなさい。」とお話しても、実際に病院にかかるまでに、ずいぶんと時間がかかる人が多いのが現実です。なぜなら、一般の皆さんの頭の中には、脳神経外科は「こわい、いたい、なおらない」というイメージがまだまだ強くある事も事実です。せっかく外来に来てでも、尻込みしてしまって、診察室になかなか入って来てくれず、漸く入ってきてくれても、「もうなんともありません。元気です!」とそそくさと帰ろうとする方がおられます。確かに、脳神経外科が担当する病気には生命に直接影響する恐ろしい病気が潜んでいることがあります。でも、

最近の脳神経疾患領域の画像診断技術や脳神経外科手術支援システムの開発は、目覚ましい進歩を遂げています。高解像度の手術用顕微鏡を駆使して、高精度で綿密な手術を支援するロボット技術は、脳の精巧な電子回路を傷つけることなく修復できるようになってきているのです。一方、コンピューター工学の進歩により、脳神経診断技術は格段の進歩を遂げ、微細な病態の診断が可能となってきました。この脳神経外科技術革新は、更にミクロの世界での手術機器開発へと進化しつつあり、脳神経外科の手術室はもう最新鋭の装置が揃った、ミクロの決死圏へと突入するまさに近未来手術室なのです。

以前は治らなかった脳の病気も、健康診断による脳ドックでの早期発見、早期治療の機運も高まってきており、一旦発生すると重篤な障害となりかねない脳神経疾患は、その予防策としての安全かつ確実な治療法の確立により、治療法は大きな転換期にきています。脳卒中発症予防のための血管内治療、パーキンソン病を治療する脳深部刺激療法、認知症を改善する神経内視鏡手術、脳腫瘍治療のためのロボット手術、腰痛に対する低侵襲手術など、脳の病気に対する治療は日進月歩です。頭に異常を感じたら、どうか不安がらずに、脳神経外科の外来に気楽にお越し下さい。





ナディック通信no.21



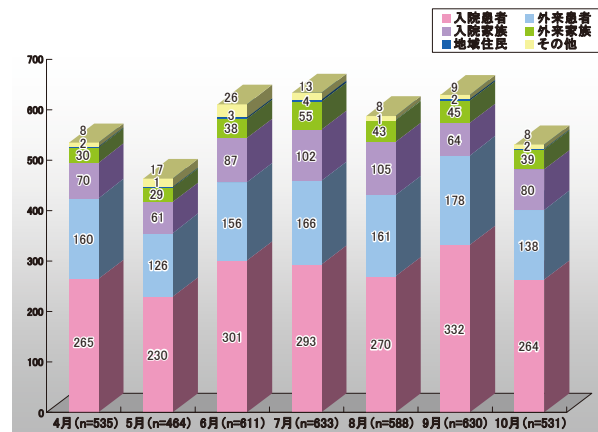
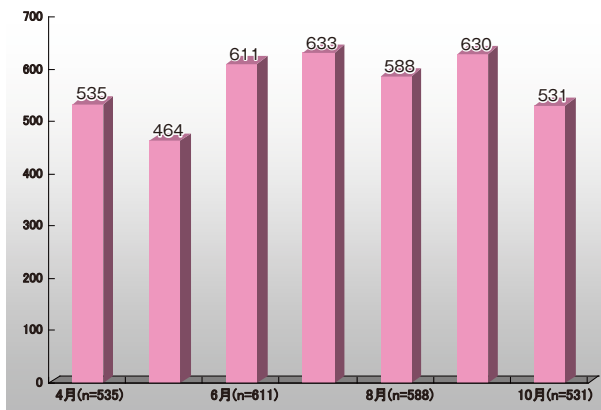
明けましておめでとうございます。今年も広場ナディックをよろしく申し上げます。
今回のナディック通信は、ナディック学習会と22年度4月～10月のナディック利用統計のご報告をさせていただきます。また、医療サービス課の中西課長にナディックへの思い・期待を伺いました。

【ナディック勉強会】



ナディック勉強会が開催されました。10月は13W病棟 山田里美看護師長(写真左)より「化学療法と脱毛～脱毛と上手につき合っていくために～」, 11月と12月はがん養成講座特任講師 阿部先生と黒柳がん相談員(写真右)より「手術後のリンパ浮腫」というテーマで学習会が開催されました。今後とも定期的に学習会を開催していきたいと思います!

【平成22年度4月～10月利用統計】



医療サービス課長 中西 達公



このたび、医療サービス課へ配置換えとなり、患者情報センター運営委員会の委員を命じられました。当委員会で種々検討され、現在の広場ナティックができあがり、患者さんへ専門的な医学知識を提供することができるようになってきました。内容的に、大変吟味されたものであり、信頼があり、現

在受けられている診療の把握の一助にも答えられる、新しい情報が満載となっています。

インターネットによる、医療関係の検索は、患者さんにとっても直ぐに大量に情報が受け取られ、広場ナティック利用者の中でも特に多くの利用があり、待ち時間ができる程だと聞いております。

広場ナティックを開館するにあたり、ボランティアさんが運営するということで、医療に関する知識があり、当院の事情に精通している方という条件で募集することになり、当初は、8名のボランティアさんが1ヶ月の間に10日間以上活動していただき大変ご苦勞をおかけした時期もあったようですが、現在では、33名のボランティアさんが活動されており、軌道に乗った運営がなされています。

また、毎日午後には、娯楽映画も放映しており、入院生活の一時の癒しを与え、音楽療法や手作り教室は毎月1回定例化され、絵手紙教室も幾度か開催されました。看護部による講習会も今後更に、充実されると聞いています。

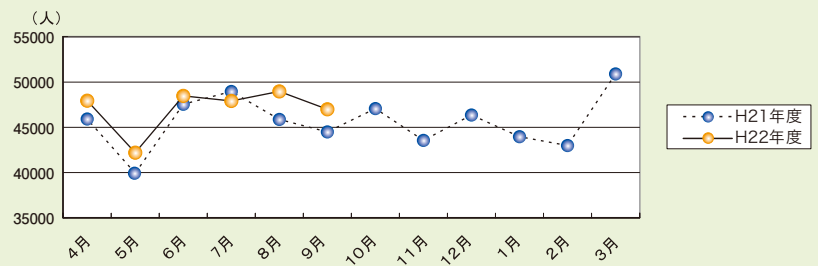
開館された当時は全国的に珍しく、病棟からすぐに来られ、これほどの便利な場所にさらに充実されていく様子も見られ、ボランティアさんの活動に支えられ、診療科医局からの専門書の提供、薬剤部からのパンフレットの設置が充実してきており、今後益々発展していくものと信じております。



名大病院の医事統計

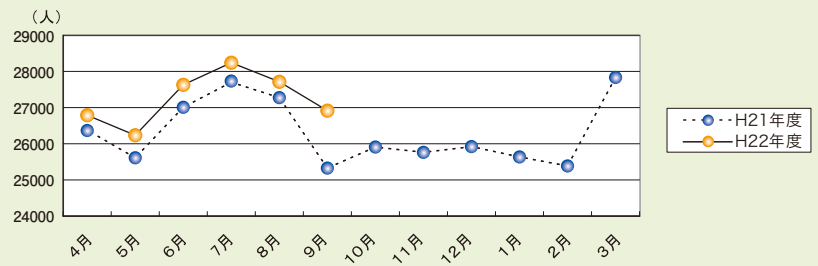
経営企画課

1. 外来患者数の推移



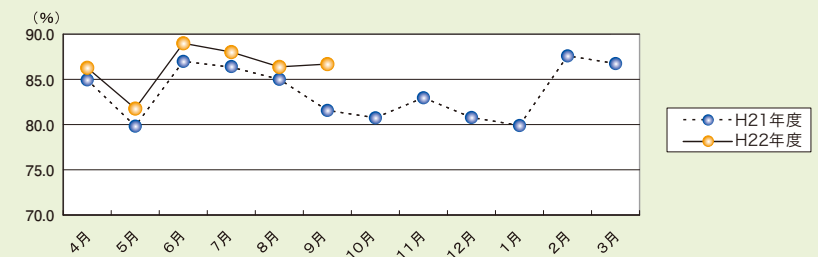
2. 入院患者数の推移

(註) 入院患者数は、在院患者延日数 + 退院患者延日数です。



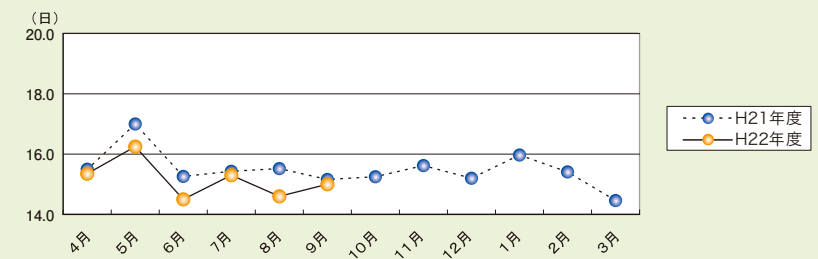
3. 病床稼働率の推移

(註) 病床稼働率の計算は、実働病床数 1015 床に対する割合です。

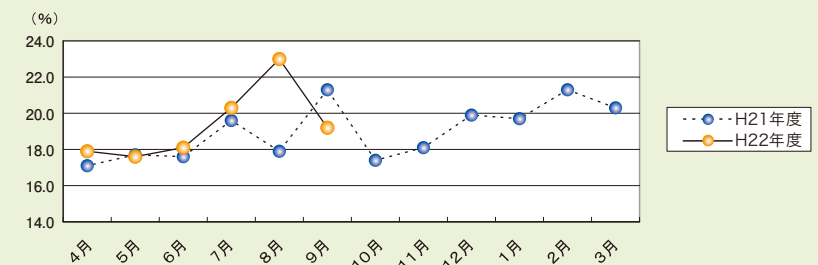


4. 平均在院日数の推移

(註) NICU, 精神病棟等を除いた一般病棟の健康保険上の平均在院日数です。

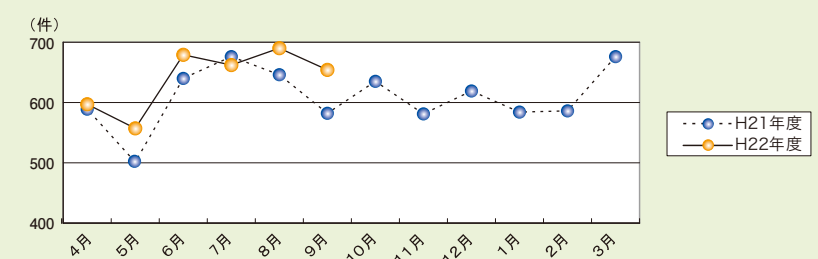


5. クリニカルパス適用率の推移



6. 手術件数の推移

(註) 中央手術室での手術件数のみです。



編集後記

新年明けましておめでとうございます。

通勤途中ですれ違う人々も、すっかりコート姿が多くなり、また、心なしか風邪を引いているのかマスクが目立つ。

そういえば、自分もここ数日体調が思わしくないなと感じながら、多少風邪気味の感があるのかと改めて振り返り、うがいと手洗いの必要性を感じながら生活している一人である。

こう寒くなってくると鍋料理が恋しくなる。一人鍋もいいが、仲間や同僚と共にワイワイと楽しく囲むのも、これからの季節ならではの楽しみである。こう考えながら師走に向かい、ともすれば寂寥の感が漂うこの季節に、心弾ませながら過ごしている。

ただ、願わくは、この不況にともない日本全体に漂う閉塞感と、近隣諸国で起きているきな臭い状況をどうにかしたいものである。

(総務課長 川村 篤)

お知らせ 『かわらばん』は、名古屋大学医学部附属病院ホームページでもご覧いただけます。

ホームページアドレス

<http://www.med.nagoya-u.ac.jp/hospital/>

(トップページ⇒最新情報⇒病院かわらばん)

かわらばん編集委員会

顧問	松尾 病院長	青山 事務部長
アドバイザー	大磯 ユタカ	
委員長	中島 務	
委員	鈴木 富雄	石川 和宏
	青山 裕一	水谷 眞規子
	姫野 美都枝	稲垣 祐子
	川村 篤	廣川 光之
	大場 亮	土屋 有司
	前田 敦子	古川 一広
	土本 重孝	

No.79

医学部・医学系研究科総務課

TEL 741-2111

(内線2228)

かわらばん編集委員会

発行日 2011年1月1日